

2026.2.26

都立戸山&お茶高による理系女子育成連携プロジェクト「女性研究者にインタビューしてみよう」は、両校の生徒が協力して女性研究者にインタビューし、そこで得たものをまとめ、全校生徒に向けて発信するプロジェクトです。ここでは生物1班の1年生5名が令和7年10月24日にオンラインで行った東京農業大学の久保倫子准教授へのインタビューを紹介します。

(1)お話を伺った先生について



久保倫子先生

東京農業大学 生物産業学部北方圏農学科准教授

一度水族館で働いたのち、麻布大学獣医学研究科獣医学専攻博士課程を修了されています。また、ご自身の研究に限らず女性研究者を増やす運動についても多大なご活躍をされています。

(2)研究内容と研究背景について

①久保先生はどのような研究をされているのでしょうか？

鹿はどのように色が見えているのかという研究が一つです。色がどのように見えるのかは鹿と共有できない感覚です。皆さんが「赤色」を見せられたら、多くの方は赤と答えます。ですが、紅色、茜色、スカーレットなど、赤色のバリエーションは多数あり、人によって異なる感じ方をします。このように、人間同士でも共有できない色の感覚は鹿と共有することは難しいです。

私の研究では、2つの異なる色のパネルをそれぞれ設置し、鹿にどちらかのパネルを選ばせて、青を選んだらご優美の餌をあげるようにしました。こうすることで鹿はいつも青を選ぶようになります。しかし、2つの色の見分けが難しいと、地団駄を踏んで嫌がるような素振りを見せたり、当てずっぽうで選ぶ行動が見られたりしました。この実験によって青緑や赤茶は訓練しないと見分けが難しく、青紫は見分けることができないという結果が出ました。人間では、青と赤紫は見分けがしやすいですが鹿ではそうではありませんでした。こうした実験によって鹿の生理学、基礎能力を知ることにつながります。

②久保先生の研究はどのように役に立つのでしょうか？

今、日本全体で鹿の数が増えすぎていて、畑の農作物を食われてしまったり、森林の幼樹を食べてしまって森林が育たなくなったり、木の皮を食べて枯らしてしまったりしています。こういった農林業被害がより深刻になっています。特に農業が盛んな北海道では48億円に及ぶ被害があり、網走市にあるキャンパスでは農家さんからもそのような話をよく聞きます。解決にはより効果のある忌避装置(=鹿を追い払う装置)の作成が必要です。そのためにエゾシカの基礎能力や生理学を研究しています。人間目線だと「赤色は炎の色」や「赤色は危険を表す」と考えてしまいます。しかし、それらの認識が鹿にも当てはまるとは限りません。鹿が世界をどう見ているのかを知ることによって、より効果のある忌避装置が作れます。

私の実験では実際にエゾシカを飼って実験しているところが特徴的です。鹿を実際に飼っている大学は珍しく、実際の鹿で実験をしてほしいと依頼を受けることもよくあります。実際の鹿の反応を見て、忌避装置の効果を確認したり、鹿の生活を知ったりすることができます。

(3)研究者について

①獣医師を目指していた頃から研究者になった現在でも変わらないもの等ありますか？

幼い頃から、動物のことが大好きで、将来は獣医師になりたいと思っていました。ただ、元々動物と触れ合うことに興味がありました。獣医師の仕事は幅広く、様々な仕事を知るうちに興味を持ったのが水族館の獣医師でした。水族館の獣医師の大切な仕事の一つが、お客さんとの対話を通して動物の面白さを伝えることだと捉えていました。動物の面白さを人々に伝えたいという点では、その方法は変わっても、研究者になった現在でも変わっていません。

ペットの飼えないところに住んでいたこともあり、動物に触れ合いたいという思いが大自然への憧れを持つきっかけになりました。この思いが、獣医師から研究者になることを決意した理由です。

②女性研究者であることによる影響や女性研究者を支える環境についてどう思っていますか？

研究をする上で男女の格差はありませんが、産休・育休による仕事の分断期間という点で女性研究者は不利な立場に置かれています。ヨーロッパでは女性研究者の割合が50%を超える国もありますが、日本では理学部や工学部などの分野でその割合はわずか18.5%程度にとどまっています。その背景は無意識の偏見や家事・育児の負担の偏りといった要因があると考えられます。

女性研究者の割合を増やす鍵となるのは、職場環境の改善です。私は2人の子どもを育てながら研究を続けています。産休・育休を2度経験しましたが、授業や学生の指導は、夫や研究者仲間の協力によって乗り越えることができました。女性研究者が少ない現状では、男性の理解と協力が不可欠です。労働量の調整や心身にゆとりを持てる環境づくりは容易ではありませんが、誰もが研究と家庭を両立できる体制の整備をすることで女性研究者を増やせるのではないのでしょうか。

(4)高校生へのメッセージ



興味のあることを一つにしぼらず、関連する領域にも目を向けて視野を広げることや、自分の好きなことを見つけて大切にしてください。たとえ遠回りに見えても、それは自分の道を広げる一歩となります。さまざまな経験や分野が思いがけないところでつながり、自分の力になっていくでしょう。

(5)感想 (お茶の水女子大学附属高等学校生より)

○私は行動する前に色々なことを考えて、実行できず、後悔してしまうことがある。先生が何を経て今の研究者という形を選んだのかについて、実際にお話を伺ってみて、あれこれ頭で考える前に、とにかく自分の目の前にあることに一生懸命に取り組んで、それを楽しむようにしようと感じるようになった。実際やってみないとわからないことは、自分自身に挑戦する好機だと思って、まずは行動に移してみるということを大切にしていきたい。(1年 N.M.)

○それまで積み上げてきた学びや努力の方向性を転換するには、相当の不安や葛藤があったに違いない。私自身、多様な行事に取り組むなかで、「これらの経験にどれほどの意味があったのか」「もしかすると無駄だったのではないかな」と感じる瞬間がある。しかし、先生のお話を通して、たとえ回り道に思える経験であっても、確かに自分の力となり、未来につながることに気づかされた。そして、積み重ねてきた自分自身を言じることの大切さを改めて実感した。(1年 M.C.)

大久保先生、お忙しいところありがとうございました！！